

(対象事業：2、先進的な展示・教育普及手法の開発等の事業)

事業名：『隆泉苑』から発信!

日本人の知恵と文化を学ぶ

事業者名：財団法人 佐野美術館

連携事業館名：三島市立南中学校

三島市立中郷西中学校

住所：静岡県三島市中田町1-43

TEL：055-975-7278

FAX：055-973-1790

HPアドレス：<http://www.sanobi.or.jp>



①施設概要

佐野美術館は昭和41年、佐野隆一のアートコレクション（2000余点）・土地・建物の寄付により開館。ほぼ1ヶ月ごとに特別展および企画展を開催し、静岡県東部の文化拠点として活動。土曜日を小中学生無料とし、周辺の私立中学1校、公立高校10校、私立大学1校と協約を結び、在校生と職員、同伴の家族2名まで無料入館にするなど、地域の青少年に対して芸術に触れる機会を提供している。

②事業の意図目的

隆泉苑は昭和初期に佐野米吉・隆一父子が富士の湧水を生かして回遊式庭園と木造建築を建造し、平成9年国の文化財建造物として登録された。3年前よりこの建物での体験学習を、三島市立南小学校6年生を対象に行っており、恒常化したい旨の希望が出されていた。また、当館の創設者にして名誉市民の佐野隆一について、以前は市内の小中学校で学ぶ時間があったが、近年は三島市への貢献などがほとんど知られていない。従ってこれらの内容をまとめた冊子をつくることによって、先生たちが学校の授業の一環として当館の施設を広く活用できるように、また子どもたちが親しく美術館を訪れることのできるような機会を提供しようとするものである。

③事業概要

当館の隆泉苑を題材に、自然と人の共生を大事にしてきた日本人の心を学び、体験するワークシート付きガイドを作成した。内容は日本の木造建築にみられる自然環境や自然素材の活用、日本間のしつらいやマナー、佐野隆一の生涯など。それらを3つのテーマに分け、3冊を1組とした。そして、上記の連携校において、当館および当館所蔵品を紹介する出前授業を行い、そのテキストとして、隆泉苑ガイドを活用した。そして、出前授業に絵画や工芸品を持参し、鑑賞の仕方を学んだ。また当館では、文部科学省および日本博物館協会の主催による「地域子ども教室推進事業」の委託を受け、4つのコースを設けた「さのび子どもくらぶ」による活動を展開している。そのうち、木の建物の特徴、日本間の作法について学ぶ「日本の心を知ろう」コースのテキストとして、隆泉苑ガイドを活用した。

④事業の製作物及び報告書等

事業の製作物	ワークシート付テキスト
名称	『隆泉苑ガイド① 日本のたてものを知る』
	『隆泉苑ガイド② 和室のマナーを知る』
	『隆泉苑ガイド③ 佐野隆一を知る』
作成した報告書等	なし

⑤参加者状況

参加者人数 延べ 183人

内 訳	小学生	26人
	中学生	157人

(1・2) 事業の実施状況および地域との連携について

① 佐野美術館の創設者の紹介、およびコレクションを鑑賞する出前授業のテキストとして活用。

参加校 : 三島市立南中学校 2年生

実施日時 : 平成16年10～平成17年2月 の間に、計10回の授業
於三島市立南中学校美術室・教室、佐野美術館講堂・展示室

参加人数 : 2年4組 40名＋美術教諭1名

指導者 : 当館学芸員2名

内 容 : 佐野美術館の概要、創立者佐野隆一翁について、学芸員の仕事
美術館の展覧会のつくり方、当館コレクションについて、
能面の鑑賞と扱い方、学芸員体験（企画から展示まで）

参加校 : 三島市立中郷西中学校 1年生

実施日時 : 平成17年2月25日（金）・3月4日（金） 各1回計2回の授業
於三島市立中郷西中学校会議室

参加人数 : のべ110名＋学校長＋美術教諭1名＋クラス担任3名

内 容 : 学芸員の仕事、美術館の展覧会のつくり方、創立者佐野隆一翁に
ついて、当館コレクションについて、掛け軸の鑑賞と扱い方

②文部科学省、地域子ども教室推進事業「さのび子どもくらぶ」の活動の一環として、
隆泉苑を会場に、木の建物の文化や日本間の作法について学ぶ「日本の心をしろう」
コースのテキストとして、参加する子どもに配布（市内・周辺市町の小中学生対象）。

実施日時 : 平成17年2月5日（土）・3月5日（土）・3月20日（日）
午前10時～12時 於当館隆泉苑書院の間・数寄屋の間

参加人数 : のべ33名

指導者 : 当館館長・学芸員、茶道指導員5名



掛け軸を鑑賞する三島市立中郷西中学校生徒



「日本の心を知ろう」コースにて和のマナーを学ぶ

(3) 成果物について

『隆泉苑ガイド』の作成

- 1、目的 隆泉苑および佐野隆一を題材としたガイドを作成。伝統的な木造建築の技、自然を住環境に取り込んだ日本人の知恵を知る。
隆泉苑を通じ、三島市の名誉市民である、当館の創設者佐野隆一翁の功績を学び、その人となりと心について考える機会とする。
- 2、対象 小学校高学年以上
- 3、体裁 A4版・オールカラー・3冊1セット
隆泉苑ガイド1 …16ページ
 " 2・3… 8ページ
- 4、部数 各10,000部、3セット計30,000部
- 5、各冊子の内容と学習ポイント

一方的なガイドでなく、キャラクターを登場させたQ&A方式で、親しみやすく分かりやすいものとした。

『隆泉苑ガイド1』編集：佐野美術館

キーワード『苑』…日本のたてものを知る

- | | |
|-----------------|---------------------|
| ① 畳・障子・土壁・廊下・天井 | 自然素材を生かした構造とデザイン、機能 |
| ② 日本間のしくみ | 書院・数寄屋の間の特徴 |
| ③ 床の間とは | 歴史、各部の名称・役割 |
| ④ 日本建築の特徴 | 光や水など、自然環境を生かした建造 |

⑤床の間のしつらい

花を生ける・軸を掛ける

⑥佐野隆一の紹介

隆泉苑の設計者として

『隆泉苑ガイド2』編集：佐野美術館

キーワード『泉』…和室のマナーを知る

①日本間の礼儀・作法

歩き方・座り方、お辞儀の仕方、襖の開け方

閉め方、お茶の歴史・抹茶と菓子のいただき方

『隆泉苑ガイド3』著作：小澤好高（三島市立中郷中学校校長）編集：佐野美術館

キーワード『隆』…佐野隆一を知る

①三島市への貢献

市へ寄贈した施設などの紹介

②生い立ち

三島生まれ、東京工業大学卒業後、
鉄工社創設

③佐野美術館の創設者

日本の伝統文化や美術への深い造詣
美術品の収集、とくに日本刀の名品を収集
美術品コレクションの財団への寄贈

④その人となり

隆一翁を知る人からのエピソード

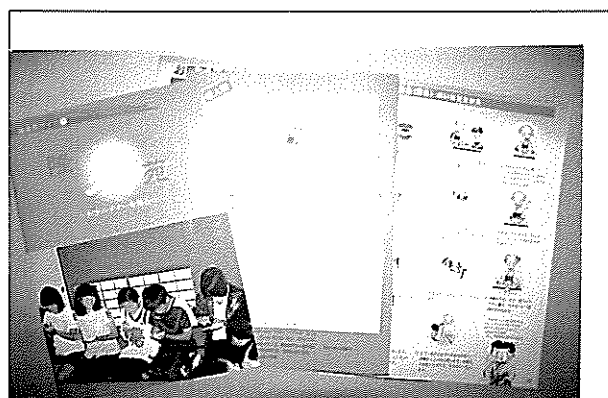
⑤主な収集品の紹介

大日如来・薙刀・網干図 等

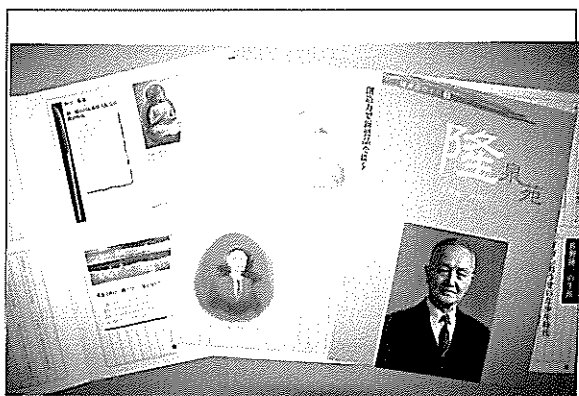
⑥佐野隆一の略歴



『隆泉苑ガイド1』



『隆泉苑ガイド2』



『隆泉苑ガイド3』

(4) 参加者の反応（三島市立中郷西中学校の感想文より抜粋）

- ・昔の人は、日本刀をいつも手入れして錆びが一つもなくてすごいと思った。掛け軸の絵は、近くでみたら立体感があって驚いた。
- ・佐野隆一さんは、ふるさと三島に恩返しをするために美術館をつくったということが分かってよかった。
- ・日本の美術や文化って、どれもみんなきれいでかっこいいものなんだ、と思った。
- ・実際に掛け軸が見られて、しかも扱い方まで知ることができてよかった。大正時代の御殿飾りのお雛様に感動したので、本物を見てみたい。
- ・美術館って、展示のためだけにあると思っていた。「後世に伝える」とか「教育」とか、すごく大事な役割があることが分かった。
- ・佐野隆一さんは三島のためにここまでするなんて素晴らしい人だと思った。

(5) 芸術拠点形成事業を実施したことによる効果

出前授業にあたっては、佐野隆一翁のことを知らない、美術館に行ったことがないという生徒が多数を占め、日本の古美術にどれだけ関心を持ってくれるだろうか、難しいのではないだろうかと考えていた。しかし授業をすすめるにつれて、「佐野隆一さんのやったすばらしいことがたくさん分かり、美術館に行ってみたいと思った」という感想や、「どうしてこういう絵を描くのか」「このお面はどんなことに使われるのか」といった質問が寄せられるようになった。特に南中学校の生徒には、能面を使った展示の企画を立ててもらい、当館で実際に展覧会を開催したが、当館が示した企画案に対して、「ここに展示したほうが、隣の面と合うと思う」という意見をいう生徒や、展示パネルを学芸員よりも器用に制作した生徒もいて大変驚かされた。授業を通じて、美術館のことを学ぶ以上に、生徒一人一人の個性や長所を引き出すことができたのは、予想以上の成果であった。

「日本の心を知ろうコース」の実施前は、床の間はむろん畳もなく、壁は化学原料という、昨今の住宅事情からして、日本の伝統的な家屋を会場に事業を実施するにあたり、参加者はどのような反応をするのだろうか、という不安があった。しかし、参加者の多数が、目を輝かせて先生の話に頷き、真剣に話に聞き入っていた姿が印象的であった。もともと日本の伝統的な文化に興味を持っていた子どもが多かったようだが、特にお茶のマナーに関心を示し、頂き方に留まらず、お茶を運んでみたい、点ててみたいという積極的な姿勢もみられ、実際に体験してもらうこととなった。

今回は限られた期間と参加者による実施であったが、今後は、学校で恒常的に佐野隆一翁のことを学ぶ機会が得られるように、また当館側でも、美術館や隆泉苑を会場に、小中学生に和のマナーや美術鑑賞を体験できる機会を増やすなど、より広域的な活動を進めていきたいと考えている。